

地域情報（県別）

【大阪】「手術はやりきった。次は…」総合病院とクリニックの中間的な存在になりたい-細野研二・ほその耳鼻咽喉科院長に聞く◆Vol.2

奈良県立医大耳鼻咽喉科教室に入局、「大阪の病院へ異動しないか」と声をかけられ

m3.com地域版

ほその耳鼻咽喉科（大阪市）の院長を務める細野研二氏は、総合病院での経験を生かして地域に貢献するべく、病院とクリニックの中間的な存在を目指している。医師を目指した経緯や地域医療の役割、今後の展開について話を聞いた。（2024年11月14日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

幼稚園の頃から医師に憧れ、子どもと触れ合える耳鼻科に興味を持った

——細野先生が医師を目指したきっかけを教えてください。

小さい頃からなんとなく医者になりたいと思っていました。親や親戚含め身近に医者はいなかったので詳しいきっかけは覚えていません。ただ、幼稚園の卒業文集に「歯医者さんになりたい」と書いていて、小学校卒業時には先生と呼ばれる職業に憧れていましたのでドクターを目指したのかもしれません。

大学卒業後はそのまま奈良県立医科大学耳鼻咽喉科教室に入局。研修医を修了したときに「県立の医科大学で学ばせていただいたからには、奈良県の医療に貢献しよう」と思い、済生会中和病院（奈良県桜井市）や大和高田市立病院（奈良県大和高田市）に勤務しました。大和高田市立病院では研修医の頃から非常勤で外来診察を担当したり、常勤で務めた後さらに非常勤で診察を続けたりするなど、さまざまな経験を積むことができました。

35歳のときに、当時の細井裕司教授（現・奈良県立医科大学理事長兼学長）から大阪の病院へ異動しないかと声をかけていただきました。奈良県の医療にも一定の貢献ができたと感じていたことや、より人口が多く症例数の多い医療機関で学びたいという思いもあり、2010年に大阪市西区の日生病院（現・日本生命病院）へ着任しました。日生病院では、指導医、同僚、後輩、その他多くのスタッフに恵まれ、本当に多くの症例を経験させていただきました。



細野研二氏

——耳鼻咽喉科を選んだ理由は何でしょうか。

幼少期に通っていた街のお医者さんが額帯鏡で診察する姿が印象に残っています。小学校の同級生の父親が耳鼻科をやっていたことも影響しているかもしれません。私は子どもと触れ合うことも好きでしたので小児科も考えましたが、耳鼻科は手術をしたらすぐ元気になって帰っていくイメージがあり、小児科よりも耳鼻科のほうが自分には向いているのではないかと思います。

医学部に入る前の恩師の一人に耳鼻科のドクターがおられ、その先生からはいつも「耳鼻科は面白いよ。開拓されていない領域がまだまだあるから研究にもお勧めだよ」と言われていたことも、興味を持った理由の一つです。

耳鼻咽喉科は、耳・鼻・喉・首と診療範囲が広い。耳が専門など、得意領域が先生によって異なる点も特徴的です。耳鼻科のドクターは人数も少ないので、まだ新しい研究の余地があるかなと感じたのも耳鼻咽喉科を選んだ理由かもしれません。

専門領域がないほうが地域の患者のためになるのでは…

——細野先生は当時、どの専門領域を目指していたのでしょうか。

本当は耳のスペシャリストを目指していました。しかし機会に恵まれず、そのうち専門領域がないほうが地域の患者さんのためになるのではと思うようになりました。私が勤めていた奈良の病院にはいろいろな症状の患者さんが来院されました。耳鼻科のドクターが多数勤務していれば問題ないのですが、少人数でしたので、この疾患は診察できるけど、こっちは診られないとなると、患者さんも困りますよね。現場で経験を積み、勉強不足だなと思えばその領域について学ぶ。自分にはそのスタイルが向いていると考え、スペシャリストではなくジェネラリストの道を行く形になりました。

——20年近く勤めた総合病院で転機になった出来事がありますか。

総合病院では手術をする機会が多く、手術にやりがいを感じていました。早くから開業される先生もいますが、私はもっと手術が上手になりたい、技術を向上させたいと思って続けているうちにある程度の年齢になってしまいました。

総合病院でさらなる高みを目指す選択肢もあったのかもしれませんが、いつかは開業したいと考えていたので、街のお医者さんとして地元子どもたちを診たり、地域の患者さんを診察したりするイメージが見えてきました。「手術はやりきった。次は何か違うやり方で地域に貢献したい」との思いが転機だったのかもしれません。



甲状腺エコー検査の様子

「見つけてくれて良かった」医者冥利に尽きる

——2021年のクリニック開業から4年近く経ち、甲状腺疾患の診療に手ごたえを感じていますか。

周辺には甲状腺の内科（内分泌内科）クリニックがいくつかあるのですが、うまく共存できていると思います。別のクリニックで甲状腺を診てもらい、当院には耳や鼻の疾患で来る方もいますが、それはそのままでもいいと思っています。ただ一般的な経過観察のために、わざわざ遠くの専門病院まで通院している方には「遠方まで大変ですね。もし症状が安定しているようなら僕の方で診ますよ」と声をかけることも。すると次回は紹介状を持って来られることもあります。医療機関が近くなって良かったと言われると、患者さんの負担を減らすことができたのかなとやりがいを感じます。

地域に圧倒的に貢献できているとはまだ言えないかもしれませんが、検査結果確認のために何回も来院しなくてもいい、通院時間が減ったと喜んでいただけるのもうれしいですね。



甲状腺触診の様子

——細野先生にとって印象的だった患者さんとのエピソードを教えてください。

甲状腺疾患に関していうと、発熱、咽頭痛が主訴で他の病院では原因不明と言われた症状を診察したら（亜）急性甲状腺炎だったというケースは少なくありません。急性甲状腺炎は一般の耳鼻科だと気付かれにくいということですね。耳鼻科を受診し血液検査をして抗生剤をもらっても治らず、何軒も病院をはしごしたという患者さんもいます。話を伺うと甲状腺炎の疑いがあり触診したら腫れもあり、痛みも一致しているからほぼ間違いないと診断できるわけです。

私はこれまで、頸部の診察や手術を数多く行ってきたので、診察の流れで患者さんの頸部をよく触診します。疑いがあれば「ちょっと甲状腺が腫れているから一度検査してもいいですか」とおききします。検査の結果、問題がなければ安心してもらえますし、万が一病気が見つかって早いほうがいいですよ。何軒も病院をまわったり、発熱が続いて体がだるかったりという症状を抱えて来られる遠方の患者さんもいますから、不調の原因が分かれば治す方法をお伝えできます。

また、リンパ腺が腫れている場合は悪性腫瘍が隠れているケースもありますので、エコーで必ず甲状腺も調べます。自覚症状がない方でも早期発見できれば治る可能性が高まります。患者さんから見つけてくれて良かったと感謝されると、医者冥利に尽きるというか、経験を重ねてきて良かったなと思います。

——ほその耳鼻咽喉科では手術も行っているのですか。

はい。手術室はありませんので可能な範囲で行っています。例えば口腔や咽頭の良性腫瘍切除や唾石摘出、鼓膜穿孔閉鎖術、鼻のポリプ切除、アレルギー性鼻炎のレーザー治療等です。患者さんの事情はさまざまで、病院を受診する時間がない方や入院が難しい方もおられます。保存的治療では完治が望めず、また放置すると症状が悪化するものもあり、クリニックでの手術という選択肢をご提案できるよう、クリニック内の設備も整えています。これも患者さんの負担を減らすとともに、総合病院の受診を減らすということを目指しているからです。



ほその耳鼻咽喉科の待合スペース

——今後、ご自身が実現したい医療をどのように形にしていこうと考えていますか。

総合病院と街のクリニックの中間的な存在になれたらと思っています。そのためには、病診連携や診診連携をもっと進めていきたいですね。例えば、甲状腺疾患の場合、専門医のネットワークをつくり、検査はこのクリニック、手術が必要な疾患はこの病院へ、術後の経過が落ち着いたらこちらのクリニックで診るという形です。病院とクリニックの連携が進めば、医師側の負担も軽減できますし、病院の待ち時間や通院回数も減らせて患者さん側のメリットも大きいと思います。

病診連携や診診連携を実現するには、病院の地域連携室と呼ばれる部門との情報交換が重要だと感じています。最近は病院側も安定している患者さんについてはクリニックへ紹介する方針を徹底するようになっており、甲状腺疾患に関する紹介先として知っていただくことが大切になります。ただ近隣の地域連携室の方々とはお話する機会があるのですが、遠方の場合なかなか交流する機会がないのが現状です。そのネットワークを文書なり直接会うなりして広げ、次につなげていくことが課題だと考えています。

——将来的に開業を考えている医師にメッセージがあればお聞かせください。

自分が理想とする医療をイメージしておくことでしょうか。クリニックだから診察だけと決めつけないほうが、やりたいことが実現できると思います。工夫次第で専門的な手術を行うことも可能です。自分の目指す医療を基に設計して、周囲に相談しながら発想を実現していく。それが結果的に他のクリニックとの差別化にもつながります。

◆細野 研二（ほその・けんじ）氏

2001年奈良県立医科大学卒業後、同大学耳鼻咽喉科教室に入局。済生会中和病院耳鼻咽喉科、大和高田市立病院耳鼻咽喉科を経て、2010年日生病院（現・日本生命病院）耳鼻咽喉科副医長。2016年同院耳鼻咽喉・頭頸部外科副部長。2018年日本生命病院耳鼻咽喉・頭頸部外科副部長。2021年ほその耳鼻咽喉科を開院。日本耳鼻咽喉科学会専門医、日本耳鼻咽喉科学会認定補聴器相談医、日本耳鼻咽喉科学会認定騒音性難聴担当医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、厚生労働省認定補聴器適合判定医、身体障害者福祉法第15条指定医、難病指定医。

【取材＝岡山朋代、文＝香川けいこ（写真はクリニック提供）】



